

終章 調査結果のまとめと提言

第1節 調査結果のまとめ

本調査研究で明らかにされた点をまとめれば、以下のようになる。

(1) 逸脱行動の実態

- ① 高校生全体の中に、とくに1割強を占める逸脱度の高い青少年（「逸脱大群」）が存在する。
- ② 「飲酒」「授業中にガムをかむ、ジュースを飲む」などの行動は、ほぼ7割の高校生が体験しており、「深夜徘徊」「パーマをかける、髪を染める」も過半数の者が経験している。「飲酒」や「深夜徘徊」が常態化している者が1割強いる。
- ③ 「都心」校や大学進学率の低い高校の生徒は、「飲酒」の経験がある者の比率や頻度が高い。
- ④ 「深夜徘徊」者比率、「授業中にガムをかむ、ジュースを飲む」経験をした者の比率は、女子よりも男子が高く、「都心」校、大学進学率の低い高校の生徒が高い。
- ⑤ 「学校内器物破損」に当たる行動をした者が、そうした行動をした理由として挙げている理由で多いのは、「ムカついたから」（41%）「なんとなく」（31%）であり、「怠学」の理由でも「なんとなく」（35%）「いやなことがあった」（27%）であり、精神的なストレスをうまく処理できない、あるいは、無自覚的な行動に走りやすい青少年の姿が見られる。
- ⑥ 「自宅金品持ち出し」「万引き」「自転車盗」などの理由からは、自分の欲望をコントロールできない青少年の姿が窺える。

(2) 規範意識の現状と規範意識に対する影響因

- ① 調査対象の高校生を規範意識の高さによって区分すると、規範意識が低いとみなされる高校生は、およそ4人に1人ぐらいの割合で存在していると推定される。
- ② 女子よりも男子に規範遵守意識の低い者が多い。
- ③ 個人道徳的色彩の強い規範については、遵守意識（「大切にしている」）はかなり高いが、それに比較して、公共性・社会性の高い道徳規範については、遵守意識が低い者が、5人に1人以上見られる。
- ④ 規範遵守意識と逸脱行動度との間には、明らかな相関がある。規範意識の低い者ほど逸脱行動度の高い者が多い。
- ⑤ 親から大切にするように言われた道徳規範としては、「人に迷惑をかけない」「きちんとあいさつをする」が約半数で比較的多いが、「社会のルールを守る」は3割弱、「がまんをする」「相手の立場を理解するように努める」「うそを言わない」などは5人に

1人しか言われておらず、「公共のものや場所を大切にすること」を親から言われた者はわずか4%しかいない。

- ⑥ 「あいさつをきちんとする」「社会のルールを守る」「公共のものや場所を大切にする」などの道徳規範の獲得には、親から子への働きかけや教育の有無が比較的大きい。
- ⑦ 道徳規範の獲得には、「がまんづよい」「意志が強い」「その場の雰囲気にならされて自分を見失うようなことはない」というような性格要因、「打ち込めるものがある」「生活が充実している」というような生活条件、「人の役に立つ人間になりたい」「自分の考えを大切にしたい」というような対社会的態度、生活価値観、おとなへの不信感などが関係している。
- ⑧ 進学率の高い高校に所属している生徒には、「社会のルールを守る」「人に迷惑をかける」という規範にコミットしている者が多い。

(3) 逸脱行動と家庭環境・家族関係との関連

- ① 逸脱行動と家庭生活満足度との間には関連が認められ、逸脱度の高い者には「こずかいが少ない」「親が自分を理解してくれない」「ほしい物を買ってくれない」などの家庭生活についての不満が多い。
- ② 逸脱度の大きい者には、「親から信頼されていない」、「親にしかられるのは怖くない」、「親の信頼を裏切るようなことはしたくない」という気持ちが乏しい者が多い。また、彼らは、父親を信頼していないが、父親に依存する気持ちもあるというアンビバレントな心理状況に置かれており、母親との関係では、とくに母親の権威を認めていない傾向が強い。

(4) 逸脱行動と学校生活との関係

- ① 逸脱度が高い者ほど、授業理解度が低い。また、逸脱度の高い者ほどクラス内での成績が下位の者が多く、四年制大学進学希望者の比率も低い。このことは規範意識の高低についても言える。
- ② 規範意識が低い者ほど、また、逸脱度が高い者ほど学校生活満足度が低く、「勉強がつまらない」「嫌いな先生がいる」「授業がわからない」など、学校生活に不満を感じている者が多い。
- ③ 大学に進学したいと思っているかどうか、学校が「都心」にあるかどうかは、逸脱行動との関連が見られ、大学に進学したいと思っていない者、「都心」に学校が立地する者には、逸脱行動をする者が多い。

(5) 逸脱行動と友人関係及び余暇行動

- ① 逸脱度が高い者ほど、他校の友だち、アルバイト先で知り合った友だち、盛り場で知り合った友だちや卒業生と過ごす者が多い。

- ② 逸脱度の高い者には、友人関係の中で友情や連帯感を強めるというよりも、集団に義理的・義務的に所属し、友人関係で葛藤を感じている者が相対的に多い。
- ③ 逸脱度の低い者が、勉強・塾・部活動や自宅で過ごす者が多いのに対して、逸脱度の高い者は、余暇生活の範囲が広く、人間関係を重視し、遊びや楽しみを追及するような現実享樂的な余暇の過ごし方をしている傾向がある。

(6) 逸脱行動とセルフイメージ・対社会的自己認識・社会観・生活価値観

- ① 逸脱行動は自己認識としてのセルフイメージ・社会観・生活価値観と密接な関連をもっている。
- ② 逸脱度の高い者は、「これまで打ち込んできたことがない」者が多く、「生活充実感」が乏しく、「将来に希望をもっている」者が少ない。
- ③ 一方、逸脱度の高い者は、低い者よりも「人より優れているところがある」「能力に自信がある」と思っている者が多く、また、「何か人から注目されることをしてみたい」と思っている。
- ④ 逸脱度の高い者ほど「その場の雰囲気流されて、自分を見失ってしまう」傾向が強く、「人の役にたつ人間になりたい」とは思っていない傾向がある。
- ⑤ 逸脱度の高い者ほど、目先の楽しみを追求する「現実享樂的」志向、過度にお金に頼る「金銭本位的」志向、運にかける「運命論的」志向が強い。
- ⑥ 逸脱度の高い者ほど、因果応報的な賞罰観を持たない傾向が強く、とくに学校の規則やきまりについては、守ることを軽視する傾向がある。
- ⑦ 逸脱度の高いものほど、社会に対する不満感、おとなに対する不信感が強い。

(7) 逸脱行動の抑制要因

- ① 違法行為である非行については、半数以上の者は「悪いこと」だと自覚しているが、「飲酒」と「喫煙」に関しては、「悪いこと」だという認識がほとんど欠如している。「無免許運転」「シンナー」に関しても、罪悪感希薄化しており、自分が責任をとればすむことだと考える傾向が見られる。
- ② 家族の逸脱行動抑制力は弱く、また、学校の教師の権威や処分もあまり抑制力を持っているとはいえない。さらに友人関係に関して、「仲間はずれにされる」「人から白い目で見られる」ことが逸脱行動を抑制するとはほとんど言えず、逆に友人関係は逸脱行動を助長する要因として作用している面がある。
- ③ 逸脱行動を抑制するのは、主に、その行動を本人が悪いことだと認識しているかどうか、その行為が「相手に悪い」と思えるかどうか、自分の健康などにとって悪い影響があると思うかどうかといったことである。
- ④ 逸脱度の低い者ほど、また、規範意識の低い者ほど、青少年が非行に走る原因は「家庭（親）」にあると考えているのに対し、逸脱度の高い者ほど、原因は「本人自身」

にあると考えている者が多い。

(8) 調査仮説の検討

- ① 序章の第2節で示した調査仮説のうち、①③④⑤⑥については、調査の結果ほぼ立証されたといえよう。②については、親の社会経済的条件との関係は、とくに見出されなかった。また親の生活態度や生活価値観、家族関係が青少年の規範意識や逸脱行動に関係していることは、本調査結果からある程度窺われたが、さらに綿密な研究に基づく検討が必要であると考えられる。
- ② ⑦に関しては、仮説のうち社会的絆、とくに親との絆、友人との絆が大きな役割を果たしているという点については立証されず、むしろ否定されたと考えられるべきではないかと思われる。このような調査結果となったのは、おそらく家族関係そのものが脆弱化しており、友人との関係も表面的あるいは希薄になってきているためではないかと思われる。社会的制裁は、逸脱行動の種類によっては若干行動抑制力を持つが、概して抑制力を減じている。

第2節 調査結果に基づく提言

最後に、本調査結果に基づき、今後の青少年施策のあり方について、いくつか提言をまとめ、本報告書の締めくくりとしたい。

提言1 家族機能強化策の必要性

本調査結果からは、青少年の逸脱行動が家族や家庭のあり方と密接に関わっていることを示唆するデータが、かなり多く見られた。これは、家族が基礎集団として、おとなの精神的情緒的安定と子どもの社会化という二つの機能を担っており、子どもや青少年の人間形成のあり方に最も深く関わっていることを考えれば当然のことともいえる。今日の家族が抱えている大きな問題点は、青少年育成の基盤として、家族の社会化機能が低下しているという点にある。家族は、子どもの性格形成、精神的情緒的な安定、おとなに対する信頼感の醸成、規範意識の形成、生活価値観の形成などに重要な影響を与えるが、そのような影響力が社会的に望ましいものとなるためには、親子のコミュニケーションが確保されることが前提であり、家族間の精神的な絆やつながり、親子間の信頼感が必要であろう。このような点で我が国の家族関係は、問題を抱えていると考えられる。家庭生活満足度は子どもの家庭生活に対する欲求充足度を表しているといえる。家族が子どもの逸脱抑制力を取り戻せるかどうかはその点にかかっているのではなかろうか。親が子どもに対する社会化役割を十全に果たせるような労働条件その他の社会的条件を整備し、家族に対するサポート体制を充実させていくことが必要である。

提言2 青少年の人間形成と社会化のためのガイドライン

第二に、本調査結果は、どのような人間形成ないし社会化の結果が逸脱行動と結びつい

ているかをかなり明確に示唆している。逸脱行動の観点からとくに問題となる青少年は、全体の1割から2割程度の青少年であると考えられるが、彼らは人格形成上のさまざまな問題や悩みを抱えている。社会的には、そうした問題や悩みを解決するために、彼らに如何なる援助の手を差し伸べることができるか、また、どれだけ効果的に教育や社会化の機能を発揮できるかが問われている。調査結果からは、性格形成上の課題としては、青少年たちが、欲求不満耐性、自己統制力、意志の力を身につけ、自我を発達させ、社会性を獲得するための人間形成方針や具体的なプログラムが必要とされているといえよう。また、逸脱度の高い青少年の特徴からは、現実享乐的、金銭本位主義的、運命論的、非社会的傾向が窺われるが、そのような問題点に関しては、生活価値観の形成に資する教育の充実が必要であろう。

彼らの中には、「何かに打ち込んできたことがない」者が多く、生活充実感も乏しい者が多く、社会的自我の形成がうまく行われていないことが窺われる。一方では、比較的高い自己実現欲求や自己表出欲求を持っており、そのような欲求を実現するルートを見出せない状況に置かれているところに問題があるのではないかと考えられる。彼らが積極的に志向できる学業達成や学歴達成以外の、社会的に承認されたオルタナティブな価値の達成や生活目標を目指すことのできる多様なルートが必要とされているとも言える。

社会的規範の内在化は、青少年の逸脱化を抑制するために極めて重要であるが、そのための方策としては、とくに公衆道徳を涵養し、他者感覚を身に付ける援助をする方策と教育プログラムが必要とされている。この点では、親は大きな役割と責任を担っていることが認識されるべきである。

第三に、本調査では、逸脱行動および規範意識と学校生活とくに学業への適応や大学進学との関係が極めて強いことが明らかにされている。言うまでもないことではあるが、「わかる」授業を実施し、生徒にきちんとした学力を身につけるような指導をすることは、逸脱行動を抑制する観点からも極めて重要である。また、学校の規則やきまりが生徒から軽視されている現実が明らかにされたが、それは見方を変えれば、学校の教育機能の低下を意味している。教師や学校が子どもたちの教育にとって必要な権威を取り戻すためにはどのような方策が必要か、十分な検討が必要であろう。規範意識の形成の観点からは言うまでもないが、生活価値観の形成の観点からは、道徳教育を含めた有効なカリキュラムや教育内容のさらなる検討が必要であると思われる。

第四に、社会環境と逸脱行動との関連からは、青少年の置かれている身近な環境条件が、逸脱行動の誘因となっていることが窺われた。青少年にとっては、最近では変化しつつあるとはいえ学歴主義社会の存在も問題であろうが、彼らの心身の発達や成長に害を及ぼす環境要因を取り除くだけでなく、健康な心身の発達成長を促進し、社会性を身につけることに役立つ有益な施設や場や機会を積極的に整備していくことが重要であると考えられる。

